様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４３２００８７

研究課題名（和文）必異原理の射程と効力に関する研究

研究課題名（英文）The Obligatory Contour Principle: Its Scope, Its Effects, and Its Role in Linguistic Theory

研究代表者
岡崎　正男（Okazaki, Masao）

茨城大学・人文学部・教授

研究者番号：３０２３３３１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,800,000円

研究成果の概要（和文）：音韻論における一般原理として認知されている必異原理（Obligatory Contour Principle、以下OCP）に関して、新たな言語現象の発見と理論的位置づけの再定義を目指し成果を上げた。現象面では、OCPが関与する現象として、ヘブライ語弱音節連続回避をはじめ10種類の現象を新たに提示し、現象ごとにOCP違反回避の方法を提案した。理論面では、turbid representation（「濁り」の表示）を提案し、不透明性の問題に解決案を示し、最適性理論（Optimality Theory）におけるOCPの位置づけを明確化し、最終年度までに精密化された。

研究成果の概要（英文）：This research project aims at reconsidering the Obligatory Contour Principle (henceforth, OCP), which was proposed to grasp the distribution of tones in African languages and has developled into a general principle in phonology, in the context of the current development of phonological theories and at making empirical and theoretical contributions to phonological studies. On the empirical side, the OCP is shown to be operative in a wide range of facts in phonology, morphology, syntax, and discourse, which have not been analyzed as OCP effects. On the theoretical side, the notion of turbidity is introduced into the Optimality-Theoretic phonologcial representation. The introduction of turbid representation enables us to provide better solutions to opacity puzzles in phonology and to clarify the role of the OCP in Optimality Theory.

研究分野：英語学

キーワード：必異原理　音韻現象　統語現象　意味現象　最適性理論

１．研究開始当初の背景

必異原理（the Obligatory Contour Principle、以下 OCP）は、最初は Leben (1973) において、アフリカ諸言語における声調の分布特性を説明するために提案された原理である。具体的には、high tone 同士、low tone 同士がそれぞれ連続しないという事実から導き出されたものである。その後の研究の進展により、概略、「同じ音韻特性がくりかえされてはならない」という広範囲の音韻現象の生起に関与する原理であることが明らかになった。

声調のほかに、次のような現象において OCP が関与していると考えられている。

(1) 分節音の分布：母音連続の回避など
(2) リズムに関する現象：主強勢隣接の回避
(3) 形態音素的音韻交替：重子音出現の回避
(4) 省略語の動詞化の際の同一音連続の回避

このように、OCP は、単に声調に関する原理ではなく広範囲の音韻現象の生起の可否も支配する一般原理とみなされるが、次に未解決問題があることも確かである。

(5) 現象：音韻現象以外に OCP によりその生起が支配されている現象があるか。
(6) 違反解消の方法：今まで明らかにされている違反解消の方法の他にどのような方法があるのか。
(7) ターゲット：OCP 適用の際に何が同じものとみなされるようになるのか。
(8) 領域：OCP の作用域はどのような言語単位なのか。
(9) 理論的位置づけ：OCP は基本的な原理か派生的な原理か。

２．研究の目的

本研究の目的は、OCP に関する未解決問題を探求し、言語研究の新たな視座を提供することを目的とする。具体的には、上記の未解決問題を始点として、次のような研究課題に取り組むことを目的とした。

(1) 音韻現象に加えて、形態論、統語論、意味論、語用論の現象で、どのような現象が OCP により支配されているのか。
(2) OCP 違反解消の方法として、今まで明らかにされた、削除、挿入、変更以外にどのようなものがあるのか。
(3) OCP 適用の際には、何がどのレベルで同じものとみなされるのか。
(4) OCP の作用域としては、形態素、語、句、文、談話もありうるのか否か。
(5) OCP の理論内部での位置づけ、わけても最適性理論内部での位置づけ、はどうなるのか。

３．研究の方法

(1) 研究組織は 6 名から構成されるが、実証班（田端敏幸、上田功、岡崎正男、佐々木冠）と理論班（田中伸一、時崎久夫）に分ける。（当初 7 名。分担者の一人の原口庄輔が初年度の平成 24 年 6 月に死亡したため 1 名減。）その上で、実証班は研究目的の(1)-(4)を中心に研究を進め、理論班は(5)を中心に研究を進める。
(2) 実証班では、次のような分担のもとに研究を進める。
　①田端、上田：語レベルの音韻現象における OCP の役割
　②佐々木：音韻論の形態論のインターフェイスにおける OCP の役割
　③岡崎：音韻論とさまざまな領域のインターフェイスにおける OCP の役割
(3) 理論班では次の分担のもとに研究を進める
　①田中：語レベルの音韻現象に着目しつつ最適性理論における OCP の位置づけ
　②時崎：句、文のレベルの音韻現象における OCP の役割と統語論における OCP の関与の有無
(4) 国内外の研究者を講演者として招聘し、講演と質疑を通して、OCP との関連を探求し、OCP の本質に関する理解を含める
(5) 研究活動の一環として東京音韻論研究会を、東京大学駒場キャンパスで開催において、年間 8 回前後開催する。年度末の研究成果報告会を開催する。さらに、4 年間の研究期間内に研究成果報告書を 2 回発行する。
(6)①国内外の学術雑誌に研究成果を論文として投稿し、掲載されることをめざす。
　②国内外の学会の研究発表に応募して採択されることをめざす。

４．研究成果

(1) 雑誌論文 24 件(査読有 19 件)、学会発表 65 件（招待講演（含、招待研究発表）15 件)、図書 19 件（単著 1 件、共著 1 件、分担執筆 17 件)、研究成果報告書 2 冊(平成 26 年度と平成 27 年度。各々論文 6 編を掲載。）の成果が挙がった。
(2) 実証班の研究成果の内容には、従来から OCP の適用例と言われている現象に加えて、新たな現象における OCP の関与と、それぞれの現象における OCP 違反解消の方法を明らかにした。OCP の関与が明らかにされた現象は、ヘブライ語の弱音節連続の回避、詩の押韻における同一音の回避、複合語アクセントの分布、有声重子音の回避、商標登録における音声的類似の特定、英詩における強勢衝突の回避、茨城県波崎方言における重子音回避、複合語の類型、日本語の複合名詞由来の複合動詞のアクセント型、北海道方言の自発語形生成過程、などである。
また、OCP の関与とは逆に、英語史上の話題化語順と強勢衝突には関連性はなく、OCP が関与しない可能性が大きいことを明らかにした。
まず、研究目的(1)に関して実績を挙げたと判断される。また、目的(3)につい

ても、OCP に関与する分節音特性と表示のレベルを個別に特定できた。目的(4)についても、OCP の作用域が語を超えて談話まで及ぶことを指摘できた。目的(2)の違反回避の方法については、多くの現象で今まで発見された方法と同じであった。これから継続して探求する必要がある。

(3) 理論班の研究成果の内容は二つある。まず、音韻表示における turbid representation（「濁り」の表示）の必要性について、ナバホ語の子音同化、英語史上の母音長化と短化、日本語の連濁などに基づき提案され、年度ごとに理論が精密化された。また、統語表示において、語順と語強勢型の相互関連、削除現象、文強勢付与、英語の複合名詞生成過程などをもとにして、OCP の関与とその意味合いについて提案がなされた。

当初の計画通り、研究目的(5)に関して実績を挙げたと判断される。まず、OCP は turbid representation との組み合わせにより、最適性理論内部に自然な形で組み込めることが明らかにされた。また、統語表示に対しても OCP が関与することも明らかにされた。いずの研究も、今後の進展が期待される。

(4) インパクト

(2)で列挙した具体的な研究成果には、現行の音韻研究に対する意味合いがある。実証班の研究成果は、今まで多くの先行研究がある OCP の関連を含めた新しい視点からの分析だけではなく、今までにあまり研究されていない現象の提示とその分析も含まれている。OCP に作用域を個別に提示した点に重要な意味合いがある。

理論班の研究成果は、今までの研究を基礎としつつ、新しい理論的視座を提供している点に意味合いがある。日本語の連濁を含む分節音過程を基礎にして提案された turbid representation は、最適性理論における音韻表示と制約適用に関して、従来の方法と異なる興味深い視点を提起している点で、重要な意味合いがあるものである。また、句レベルや文レベルの強勢型の具現における OCP の役割の具体的な例は、OCP の作用域が語レベルだけでなく、句や文のレベルもその作用域とすることを明示した点で重要な意味がある。

(5) 今後の展望

研究目的(1)-(5)に関して、実績が上がった部分について、研究組織の個々人が、これからもさらに探求し、体系的な論考にまとめる計画を立てる。新たな発見が少なかった研究目的(2)については、個別に現象と OCP 違反回避の方法について、調査を続ける。

また、OCP をもう少し大きな文脈でとらえ直す研究を進める。2016 年度から 5 年間、本研究課題と同じ研究代表者のもと、科学研究費補助事業（科学研究費補助金）基盤研究 B「隣接諸科学乗り入れ型の手法による音韻理論の外的・内的検証の研究」が採択されており、分担者 6 名の中に、田端、田中、上田、時崎の 4 名が含まれている。OCP 関連の論点は、周辺的ではあるが、必然的に具体的論点に入ってくる。それゆえ、広い視野から、OCP の相対的位置づけ、射程、効力を見極めることになることが予想される。

(6) その他

① 各年度末に研究成果報告会を合計 4 回開催し、代表者と分担者の成果を発表し、質疑を通して OCP への理解を深めた

② 東京音韻論研究会を、各年度とも開催した。年度ごとに開催できない月があったが、翌月以降の開催により、研究活動が停滞することはなかった。

③ 次に挙げる研究者を講演者として招聘し、講演と質疑を通して OCP への理解を深めた。

平成 24 年度：三間英樹（神戸市外国語大学）、山田英二（福岡大学）、三村竜之（室蘭工業大学）、Mark Irwin（山形大学）、那須川訓也（東北学院大学）、米田信子（大阪大学）、桑本裕二（秋田工業高等専門学校）、平郡秀信（中京大学）。

平成 25 年度：大田聡（山口大学）、菊池清一郎（東北大学）、白石英才（札幌学院大学）、窪薗晴夫（国立国語研究所）、高山知明（金沢大学）、Michael Hammond（アメリカ合衆国・アリゾナ大学）、Thais Cristofaro Alves de Silva（ブラジル連邦共和国・ミナスゲライス大学）。

平成 26 年度:西村康平(愛知淑徳大学)、吉田優子（同志社大学）、佐々智将（岩手県立大学）、Bridget Samuels（アメリカ合衆国・南カリフォルニア大学）、Marc von Oostendorp（オランダ王国・ライデン大学）、Wayne P. Lawrence（ニュージーランド・オークランド大学）。

平成 27 年度:Pintér Gábor(神戸大学)、山本武史(近畿大学)、Fred Eckman（アメリカ合衆国・ウィスコンシン大学）、Yoon Taejin(大韓民国・誠心大学)、Chang Woohyoek（大韓民国・壇国大学）。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２４件）

① Hisao Tokizaki “Stress and Restrictivess in Phrase and Compound” *JELS* 32、346-352、2015、査読有

② Shin-ichi Tanaka “Turbid Optimality Theory: A Constraint-Based Solution to Opacity and the DYG Derivations” *Proceeding of the 5th International Conference on Phonology and Morphology*、177-191、2014、査読有

③ Shin-ichi Tanaka "Two Phonology or One?: Some Implications of the DYG for Biolinguistics" *English Linguistics* 31、593-622、2014、査読有
④ Isao Ueda "On the Nature of Functional Misarticulation in Japanese" *Proceeding of the 5th International Conference on Phonology and Morphology*、97-109、2014、査読有
⑤ 田中伸一「濁りの表示と不透明性(1)：日英語の有声音の深層と表層」*JELS* 31、193-199、2014、査読有
⑥ Masao Okazaki "Review: *Toplicalization and Stress Clash Avoidance in the History of English* by Augustin Speyer" *English Linguistics* 30、439-450、2013、査読有
⑦ Shin-ichi Tanaka "The Duke-of-York-Gambit and Other Opaque Derivations in English: Evidence for Harmonic Serialism"『音声研究』17、46-58、2013、査読有
⑧ Shin-ichi Tanaka "Review of Labrune (2012) *The Phonology of Japanese*"『音声研究』17、70-80、2013、査読有
⑨ 上田功「機能性構音障害の音韻分析―臨床的視点からの考察―」『音声研究』17、21-28、2013、査読有
⑩ Isao Ueda "Retention of Irregular Feature Specification as a Source of Functional Misarticulation" *Phonologia* 11、1-19、2013、査読有
⑪ Hisao Tokizaki "Stress Location and Comparative Forms in English"『音声研究』17、59-66、2013、査読有
⑫ Hisao Tokizaki "Deriving Compounding Parameter from Phonology" *Linguistic Analysis* 38、275–303、2013、査読有
⑬ Kan Sasaki "Anticausativization in the Hokkaido Dialect of Japanese" *Asian and African Languages and Linguistics* 7、25-38、2013、査読有
⑭ Masao Okazaki "Emily Dickinson's Rhyme Revisited" *The Emily Dickinson Society of Japan Newsletter* 31、19-22、2013、査読有
⑮ 岡崎正男「West Germanic Gemination 再考」*KLS* 32、37-48、2012、査読有

〔学会発表〕（計６５件）
① 岡崎正男「不完全脚韻と音韻理論」筑波英語学会第 36 回大会（招待講演）、2015.11.15、筑波大学（茨城県・つくば市）
② 佐々木冠「インターネットの方言データ―有効性と限界―」日本語文法学会第 16 回大会（招待講演）、2015.11.15、学習院女子大学（東京都・新宿区）
③ 田中伸一「英語の音の体系・音の文法」順天堂大学国際教養学部英語学講演会（招待講演）、2015.5.26、順天堂大学御茶ノ水キャンパス（東京都・文京区）
④ Hisao Tokizaki "Asymmetric Stress and Transfer to PF" The 25th Colloquium on Generative Grammar、2015.5.21-23、Center for the Study of the Basque Language（フランス共和国・バイヨンヌ市）
⑤ Shin-ichi Tanaka "Turbid Optimality Theory: A Constraint-Based Solution to Opacity and the DYG Derivations" The 5th International Conference on Phonology and Morphology(招待講演)、2014.7.3–5、全南大学(大韓民国・光州市)
⑥ Isao Ueda "On the Functional Nature of Misarticulation in Japanese" The 5th International Conference on Phonology and Morphology(招待講演)、2014.7.3–5、全南大学(大韓民国・光州市)
⑦ 時崎久夫「語順と語強勢の変化―OV から VO へ」近代英語協会第 31 回大会シンポジウム（招待講演）2014.6.28、日本大学文理学部（東京都・世田谷区）
⑧ 田端敏幸「複合語アクセントの類型」音声学・音韻論特別公開講演会・研究発表会（招待講演）、2014.2.14、福岡大学（福岡県・福岡市）
⑨ 田中伸一「濁りの表示と不透明性(1)：日英語の有声音の表層と深層」2013.11.9、日本英語学会第 31 回大会（招待研究発表）、福岡大学（福岡県・福岡市）
⑩ Kan Sasaki "Copula-Initial Devoicing in the Hasaki Dialect of Japanese" The 26th Paris Meeting on East Asian Linguistics、2013.6.27、Ecole des Hautes en Sciences Sociales（フランス共和国・パリ市）
⑪ 岡崎正男「不完全脚韻再考」日本英文学会第 85 回大会（招待研究発表）、2013.5.25、東北大学（宮城県・仙台市）
⑫ 田中伸一「日本語有声音をめぐる 3 つの謎を解く」新潟大学人文学部主催公演会（招待講演）、2013.3.8、新潟大学（新潟県・新潟市）
⑬ Kan Sasaki "Another Look at *Sa*-Inseration in Japanese" Fall Conference of the Linguistic Society of Korea、2012.10.27、ソウル大学（大韓民国・ソウル市）
⑭ 岡崎正男「Emily Dickinson の脚韻再考」日本エミリィ・ディキンスン学会第 27 回大会シンポジアム（招待講演）、2012.6.30、国際基督教大学（東京都・三鷹市）
⑮ Isao Ueda "Two Types of Japanese Rhotacism" The 14th International Clinical Phonetics and Linguistics Conference、2012.6.27、University College Cork（アイルランド共和国・コ

ーク市）

〔図書〕（計１９件）

① 中村渉、佐々木冠、野瀬昌彦、くろしお出版、『認知類型論』、2015、352 頁（pp163－211）

② 岡崎正男、開拓社、『英語の構造からみる英詩のすがた－文法・リズム・押韻』、2014、204 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

岡崎　正男（OKAZAKI　MASAO）
茨城大学・人文学部・教授
研究者番号：30233315

(2)研究分担者

田端　敏幸（TABATA　TOSHIYUKI）
千葉大学・言語教育センター・教授
研究者番号：00135237

田中　伸一（TANAKA　SHIN-ICHI）
東京大学・総合文化研究科・教授
研究者番号：40262919

上田　功（UEDA　ISAO）
大阪大学・言語文化研究科・教授
研究者番号：50176583

時崎　久夫（TOKIZAKI　HISAO）
札幌大学・地域共創学群・教授
研究者番号：20211394

佐々木　冠（SASAKI　KAN）
札幌学院大学・経営学部・教授
研究者番号：80312784

原口　庄輔（HARAGUCHI　SHOSUKE）
明海大学・外国語学部・教授
研究者番号：50101316
（平成 24 年 6 月に死亡したため、分担者から削除）

(3)連携研究者

無し

(4)研究協力者

無し